資料 平三十、三月十八日 「百年史」より

高知県護国神社のあらまし

鎮座地　高知市吸江二一三　電話②二七六〇
名　称　高知県護国神社
祭　神　護国の英霊四万一千三百七十七柱　（昭和四十六年四月一日現在）
例大祭　毎年四月一・二日、十一月一・二日

高知県護国神社は、幕末以来国事に殉じた志士をはじめ、明治新政以来の国難に戦歿せられた将兵をはじめ、特に日清、日露の戦役をはじめ、今次の太平洋戦争にあたり国事に斃れた神霊四万一千三百七十七柱を招魂鎮座した神社である。

明治元年（一八六八）十一月二十九日土佐国主山内豊範は、高知城下致道館（今の高知刑務所）で、戊辰東征の陣歿志士一〇五柱の霊を招魂し、その神霊を永く鎮祭するため、いまの高知市五台山大島岬の地を社域として、翌明治二年（一八六九）三月社殿を建立せられた。そうして地名にちなんで大島岬神社といい、五月社殿竣工とともに神霊を鎮座地に奉遷せられたものである。

明治八年（一八七五）五月三十一日当社は招魂社と改称し、特に官祭の招魂社となった。

昭和十四年（一九三九）三月二十四日高知県招魂社と改称。四月一日高知県護国神社と改称し、指定護国神社となった。

大東亜戦後、昭和二十一年（一九四六）占領下の宗教法人令のもと国の管理をはなれた。同時に社名ももとの大島岬神社と改称した。その後崇敬者の多数の熱望によって昭和三十四年（一九五九）七月社名は再度高知県護国神社と改称することになった。

神霊実に四万一千三百七十七柱は、高知県民にとって血縁あり、地縁あり、職場の縁あり県民ともっともつながりの深い神社で、県民とともにある高知県護国神社である。

当社には奉賛会がある。戦後国の管理をはなれ、占領下にあってもっとも困難をきわめた時、県下同憂の士は協力一致、英霊の慰霊祭祀並に神社の経営に尽力し、今日の基礎を堅め神社奉賛に全力をあげて今日に至っている。

1

菊の御紋使用

明治十四年三月内務省へ伺并指令写

当県下長岡郡吸江村官祭招魂社は、旧藩主の創立にして社殿屋根廻り鬼板等その他各所に藩主の家章相用居候所、往々朽腐につき取替を要すべきもの有之候節は、菊の御紋相用可然哉　尚該社は官営にして且つ官祭の社に行へば府県社以下の諸社に異り候儀に付国幣社と同様　幕、提灯等の如きも　菊の御紋相用不苦候哉　此段相伺候也

指令書面の趣は　社殿の粧飾に限り聞届候事　四月十三日

2

一　由　緒

明治元年（一八六八）辰の十一月二十九日と三十日土佐国主従四位山内豊範は、戊辰東征の役に戦死した土佐藩の士卒一百四名の霊を高知致道館内で招魂し、慰霊の盛典を行なった。

この致道館は、今の刑務所のあるところで、現在の門は昔の姿がそのままである。これは藩の子弟に文武両道を修得させたところで文武館ともよんだ。

翌明治二年（一八六九）三月十二日、今の高知市五台山吸江の大島岬に土地を定めて社殿を構築した。そうして建社の地名にちなんで以来大島岬神社とよんできた。

社域をここに移したのは明治二年の五月である。そののち神社の修繕も、祭典のすべてのことを高知藩の費用で行なった。

ところが廃藩置県があり、明治七年四月はじめて官費支給となった。そうして同年八月四日明治元年戊辰東征の役の戦死者一名を追加して計一百五柱の英霊を祭祀した。

翌明治八年（一八七五）五月三十一日再び招魂社と改称した。明治十一年（一八七八）九月二十四日佐賀の乱、熊本の乱及西南の役の戦死の土佐、阿波両国の士卒一百六十六名を祭祀した。

さらに明治十四年（一八八一）七月に、明治元年戊辰から明治二年己巳の間に国事にたおれた八十名を祭祀した。

明治十八年（一八八五）三月二十七日戦死者一名を追祀した。明治二十二年（一八八九）七月二十七日国難に斃れた五名を祭祀し、明治二十四年（一八九一）十一月二十七日には奥羽の役に戦死した十七名を私祭に合祀する。

高知市吸江

高知県護国神社

昭和四十一年定例評議員会の議を経て昭和二十三年規程第十五号の別表に掲げる神社のうちに加列せらる

昭和四十一年七月一日

神社本庁

戊辰の役

伏見の戦

大政奉還後の新政府第一回の会議は、慶応三年（一八六七）十二月九日の小御所で行なわれた。その結果は慶喜の辞官納地の決論であった。

江戸表の幕府方は、大政奉還の一つでも一大驚愕であるのに慶喜の辞官納地に至って、憤慨の極に達した。

その上十二月二十二日江戸城西の丸が火災にあった。こうしたことは、岩倉や西郷たちが薩長手がをくんであくまで討幕に出る腹である。西の丸の炎上もきっと薩摩藩の浪士の仕業であるというので薩邸へ交渉した。しかし応じない。そこで幕府方は薩摩藩邸を襲撃し、これに焼打をかけた。そうして徹底的の反抗を決意した。

この事件を聞いた大阪在城中の幕軍は、すぐ戦闘の準備をした。岩倉の苛酷な態度にこころよからぬ慶喜も意を決し、滝川具知（ともさと）を先発軍として明治元年（一八六八）一月三日討薩表をもって上京した。

幕府軍の会津と新選組は竹中重固が指揮して伏見街道から進撃する。大垣、桑名の軍は松平正質（まさただ）が指揮して同じく伏見街道を進撃。その数一万五千という。これを迎え撃つ薩軍はわずかに六千五百である。

この鳥羽伏見の戦は、薩軍の近代銃火の前に幕府軍はたちまちのうちに潰走した。

一月三日の夜、仁和寺宮嘉彰親王は軍事総裁となり、翌四日には征夷大将軍として錦旗をいただき、七日には

徳川征討を宣せられた。

大阪城にいた徳川慶喜は、形勢が不利であることを知ると、江戸に帰えるため大阪城を脱出して、海路東航江戸に向った。そのため一月九日には大阪城は官軍のものとなった。

大阪通過のできない幕軍は堺の港から脱出したので堺港は大混乱になった。箕浦猪之吉、西村左平次らの土佐藩兵が後にその守備についたのは、この混乱をすくうためである。

この伏見の戦に、高知藩士族筒井芳五郎茂久は軍の五番隊に所属して山城国伏見で銃創をうけた。幾生中二月十日死亡、三十八歳、東山に葬る。戊辰戦最初の戦死者である。平定までに約百五名の戦死者を出している。

維新殉難志士

高知県護国神社の合祀歴によると、第四回は、明治十四年七月二十七日である。この時は文久、元治以降国事に斃れた勤王の志士の祭祀を行なっている。

さらに第六回の明治二十二年七月二十七日五柱の勤王志士を追祀して計八十六柱となっている。

明治新政を樹立した郷土の志士達の功績は大きい。武市半平太を中心として百九十余名の勤王血盟の志士達は、藩政の圧迫に堪えかねて、脱藩につぐ脱藩を行なった。そうして長藩により、薩藩により、或は京阪神その他に流浪し身命をなげうって徳川幕府打倒、天皇政治の回復に力をつくした。

武市半平太は、新政を見ずに、慶応元年閏五月十一日、高知城下南会所の東北の隅で、切腹を命ぜられた。そうして三十七歳を一期としたが、彼の理想は藩主を奉じて一藩勤王にすすむ大理想をかかげていた。また天皇きちがいといわれるほどで天皇政治の実現を望んだ。山内藩の要路に一藩勤王を説くと、

「山内家は関ガ原以来三百年の恩顧がある。」

と攻反撃された。半平太は、

「開国以来二千年の御恩とはくらべものになりません。」

と、再反撃をしている。

半平太は、この手段として薩長土三藩が協力一致することであった。しかしそれまでにはなかなかの大きな壁

があった。半平太の時は成就しなかった。しかしそれは彼の同志、坂本龍馬、中岡慎太郎らによってみごとに達成した。

内外の状勢が急転すると、土佐の後藤象二郎も、板垣退助らも坂本龍馬や中岡慎太郎の力を借りねば、も早公武合体では間にあわなくなった。

坂本の船中八策は後藤象二郎によって山内容堂の採用となり、徳川幕府に向って大政奉還の建白書となった。戦火を交えず政権の奉還は、日本史にかがやく、世界に類を見ない平和的の大改革である。その歴史的大業をなしとげたのも我が土佐藩に負うところ大である。

奉還後一カ月、中岡慎太郎、坂本龍馬は、慶応三年十一月十五日京都三条小橋、醤油屋近江屋新助の二階で、会津見廻組の一隊に暗殺された。新政に対して大くの抱負をもちながらその手腕を発揮することができず誠に残念千万である。

坂本、中岡ばかりでなく、文久三年九月には、実力倒幕の第一陣に消えた天誅組総裁吉村虎太郎の義挙がある。中山忠光卿を奉じ、討幕の主力になった土佐の志士達には、天朝のために死すことあたかも帰するが如しの感があった。

上土（うわつち）は大守さま（藩主）のもの底土は天子さまのものという思想は庄屋ばかりか、農民の間に流れていた。

脱藩途上で倒れたもの、他郷に病魔のためいのちを失ったもの、池田屋騒動に、九門の変に、天王山に、長崎の海に、勤王党大獄のため獄門に倒れたもの総計八十五名。百九十余名の志士の半数近い数である。尊い血税である。血のぎせいはあまりにも尊いほど尊い。

合祀歴

合祀祭回数	合祀年月日	合祀祭神数	摘要	累計
第一回	明治 元・一一・二九	官祭一〇四柱	東征役戦歿高知藩士卒	一〇五
第二回	同 七・八・四	〃 一柱	同 上	二七二
第三回	同 一一・九・二四	私祭一六七柱	佐賀、熊本西南各戦役戦死の土佐、阿波両国の士	三五二
第四回	同 一四・七・二七	以下同八〇柱	文久、元治以降国事に斃れた勤王の志士	三五三
第五回	同 一八・三・二七	一柱	朝鮮国変乱戦死者	三五八
第六回	同 二二・七・二七	五柱	勤王殉難の志士	三七五
第七回	同 二四・一一・二七	一七柱	戊辰役死歿者	
第八回	同 三〇・五・六	二一柱	明治二十七、八年役戦病死者将校下士卒	
第九回	同 三一・五・六	九柱	同 上、下士卒	
第一〇回	同 三二・四・二	二〇七柱	同 上、及台湾守備討匪戦病死者将校下士卒	
第一一回	同 三三・四・二	一一柱	同 上	
第一二回	同 三五・四・二	一五柱	明治二十七、八年戦役死没者	六四八
第一三回	同 四一・四・一	二、五二一柱	明治三十七、八年役死歿陸軍少将安村範雄外	三一六九
第一四回	同 四二・四・一	一一柱	〃 陸軍三等主計和田正雄外	三一八〇
第一五回	同 四三・四・一	一二柱	〃 陸軍歩兵中尉赤沢運外	三一九二
第一六回	同 四四・四・一	二柱	〃 陸軍歩兵一等卒山崎勘外	三二九四
第一七回	同 四五・四・一	九柱	台湾土匪及生蕃討伐に死歿警部小松勇馬外	三二〇三
第一八回	大正 三・四・一	一柱	同 上、巡査畠中弥之松	三二〇四
第一九回	同 四・四・二三	五柱	同 上、警部補三浦義質以下四名及日独戦死歿海	三二〇九
第二〇回	同 六・四・一	二柱	軍主計少尉村岡春馬	
			明治三十七、八年戦役及大正三、四年役戦病死者	三二十一
第二一回	同 九・七・二六	一五柱	海軍二等兵曹谷脇伝蔵外	
			堺事件殉難箕浦元章等十一名、シベリヤ出征並日	三二二六
			独戦死者砲兵少佐上原速視外	
第二二回	同 一五・四・一	五五柱	シベリヤ事変戦病死者砲兵少佐森静江外	三二八一
第二三回	昭和 九・四・一	四柱	満洲事変戦病死輜重兵軍曹宮崎良正外	三二八五
第二四回	同 一一・四・一	三柱	同 上、歩兵上等兵山崎富士外	三二八八
第二五回	同 一二・四・一	八柱	同 上、工兵大尉水田健晴外	三二九六
第二六回	同 一三・四・一	一〇柱	満洲事変戦傷病死者歩兵曹長森田能実外	三三〇六
第二七回	同 一四・四・一	六一九柱	満洲事変並支那事変死歿歩兵少佐細木繁外	三九二五
第二八回	同 一五・四・一	五〇五柱	同 上、陸軍少将佐竹個一郎外	四四三〇

第二九回	同	一六・四・一	一六四柱	同　上、陸軍航空兵中佐桑名久寿喜外
第三〇回	同	一七・四・一	二〇七柱	同　上、陸軍少将清水喜代美外
第三一回	同	一八・四・一	二二五柱	同　上、陸軍砲兵中佐近藤虎之助外
第三二回	同	一九・四・一	三八五柱	同　上、及大東亜戦陸軍主計少将明石猛繁外
第三三回	同	二〇・四・一	六六七柱	満洲事変から大東亜戦までの戦傷病死者陸軍中佐 六六七八 田中靖三外
第三四回	同	二一・四・一	六二二柱	日華事変及南太平洋戦争海軍少佐戸梶忠恒外
第三五回	同	二二・四・一	二、六七五柱	同　上、陸軍法務中将岡村駿児外
第三六回	同	二三・四・一	九、四二八柱	大東亜戦争
第三七回	同	二三・一・六	四、四四八柱	同
第三八回	同	二四・四・一	二、九一〇柱	同
第三九回	同	二四・一・一	一、〇六六柱	同
第四〇回	同	二五・四・一	二、三八三柱	同
第四一回	同	二五・一・四	四、二一三柱	同
第四二回	同	二六・四・一	二、一二四柱	同
第四三回	同	二六・一・一	一、一八三柱	同
第四四回	同	二七・四・一	二三六柱	同
第四五回	同	二七・一・一	一九八柱	同

11

第四六回	同	二八・四・一	二八四柱	大東亜戦争
第四七回	同	二八・一・一	一八九柱	同
第四八回	同	二九・四・一	九二柱	同
第四九回	同	二九・一・一	二八柱	同
第五〇回	同	三〇・四・一	三〇六柱	同
第五一回	同	三〇・一・一	二九〇柱	同
第五二回	同	三一・四・一	一七五柱	同
第五三回	同	三一・一・一	九五柱	同
第五四回	同	三二・四・一	八二柱	同
第五五回	同	三二・一・一	九五柱	同
第五六回	同	三三・四・一	一四四柱	同
第五七回	同	三三・一・一	四四七柱	同
第五八回	同	三四・四・一	一五一柱	同
第五九回	同	三四・一・一	三三〇柱	同
第六〇回	同	三五・四・一	八〇柱	同
第六一回	同	三五・一・一	一〇八柱	同
第六二回	同	三七・四・一	一〇〇柱	同
第六三回	同	三八・四・一	一〇八柱	同

12

第六四回	同	三九・四・一	七五柱	大東亜戦争
第六五回	同	四〇・四・一	五三柱	同
第六六回	同	四一・四・一	三〇柱	同
第六七回	同	四二・四・一	九七柱	同
第六八回	同	四三・四・一	一七七柱	同
第六九回	同	四四・四・一	二一六柱	同
第七一回	同	四五・四・一	三三柱	同
第七二回	同	四六・四・一	三二柱	同
累計			四一、三七七柱	